鎌倉市教育委員会

研究成果報告書

１．研究概要

「すべての子供たちに、ユニークな学び方がある」という理念の下、児童生徒自身のユニークな学び方（認知特性・学習特性）を開花させることを目指し、学校での学習に馴染めないと感じている鎌倉市立小中学校の児童生徒（小学校４年生～中学校３年生）を対象として本市が実施している「かまくらULTLAプログラム」を更に発展させ、児童生徒が自らの学びの特性を把握し、それを発揮する場を地域の人材と共に作り上げるとともに、その成果を学校や保護者等と密に共有し、地域社会全体で児童生徒の学びを支えていく仕組みづくりについて以下の２つの柱に基づく研究を行う。

（１）教育委員会が主催する児童生徒向けの探究プログラムを通じた研究

児童生徒自身が自らの学びの特性を知るための学術的な根拠に基づくアセスメントや、アセスメント結果を活用しながら児童生徒自身が自分のユニークな学び方を「認識して、発揮して、ワクワクする」ことができる探究プログラムの開発・実施を通して、学校内外における効果的な「個別最適な学び（特に、学習の個性化に関すること）」の在り方について研究し、その成果を令和７年度（2025年度）設置予定の学びの多様化学校（不登校特例校）における新教科に組み込むなど、単発のプログラム実施に終わらず公教育全体の変革につなげることを目的とする。

（２）かまくらULTLAプログラムのエッセンスを地域全体に広げるためのワークショップ研修の開発を通じた研究

アセスメントや各教科のものの見方・考え方を統合的に盛り込んだ学際的な学びづくり、地域の教育資源を活かした学習活動など、かまくらULTLAプログラムの理念やノウハウを学校における授業や地域におけるワークショップなどの様々な場所で体現できるよう、地域の方々や教職員等を対象にしたワークショップ研修を開発・研究する。本研究により、様々な学びの特性を有する児童生徒がその特性を発揮しつつ学べる場所を数多く作り、地域社会全体で児童生徒の学びを支える環境づくりに繋げていくことを目的とする。

本研究の実施に当たっては、多重知能理論など発達心理学の高度な知見を盛り込んだアセスメントの開発・実施や、アセスメント結果を学びに直接活かしていくプログラムの開発・実施、児童生徒の多面的な見取りを収集するICTシステムの運用など、教育委員会が有していない専門的な知見を活用するため、これらの分野に関して専門的な知見・技術を有する事業者と一体となって研究を進めていく。教育委員会が研究全体を強力に統括しつつ、自らが有しない知見を備えた学校外の機関と一体的に事業を推進することで、最短で高度な教育実践を生み出す新たな教育行政モデルを提示することを目指す。

２．研究内容

（１）研究課題

（研究領域１）学校内での取組に関すること

☑　ａ 単元内自由進度学習や異年齢集団による学習、理解の状況に応じた課題の設定など、特異な才能のある児童生徒をはじめ子供の関心等に合った授業や学習活動の在り方

☐　ｂ 特異な才能のある児童生徒を含む全ての子供たちが互いに尊重される授業や学級経営の在り方など、多様性を包摂する学校教育環境の在り方

☐　ｃ 児童生徒が普段過ごす教室や学校内の他の教室等、指導・支援に取り組むための多様な学びの場の設定や連携の在り方や、過ごしやすい居場所としての環境整備・人的サポート等の在り方

☑　ｄ 特性等を把握するためのサポートを受けながら行う特異な才能のある児童生徒への指導・支援の在り方

☐　ｅ才能と障害を併せ有する児童生徒への対応の在り方

（研究領域２）学校と学校外との連携に関すること

☑　ｆ学習面・生活面にわたる学校と学校外との機関との連携による指導・支援の方法

☐　ｇ 特異な才能のある児童生徒に支援を提供するための学校外の機関の在り方や、その機関と連携して学習を行う際の学習状況の把握や学習評価の在り方

☐　ｈ才能と障害を併せ有する児童生徒への対応

（研究領域３）児童生徒を取り巻く環境の整備に関すること

☑　ｉ教職員への研修の在り方や、保護者、地域社会の理解の醸成の在り方

☐　ｊ各主体が保有する情報集約や、主体間の情報連携・共有の在り方

☐　ｋ 児童生徒の機微な情報の共有の在り方、進学時の情報の引き継ぎなど学校段階間の連携の在り方

（２）研究における取組

ア　アセスメント

児童生徒自身の学び方、主に認知特性、関心領域、思考スタイル及び好奇心スタイルの４分野における特性を把握するため、学術的な根拠に基づいたアセスメントを実施し、個々の児童生徒の学びの特性を言語化し、包括的に明らかにした。

アセスメント結果は、その時の心理状態、興味関心等によって変化していくことが考えられることから、探究プログラム前後の学び方の変化を見ることができるよう、児童生徒が一人一台持っているタブレット端末を活用して、プログラム前後にアセスメントを１回ずつ実施し、児童生徒を見とるとともにプログラムの有効性について検証した。

イ　探究プログラム

教育委員会と再委託業者（株式会社SPACE）が連携して、探究プログラムを開発・実践した。探究プログラムの開発にあたっては、自然環境、寺社仏閣などの歴史遺産、地元企業や地域で活躍する方々等の鎌倉市が持つ豊富な教育資源を活用し、「海」と「森」をテーマにそれぞれ３日間実施した。

探究プログラムは大きく分けて、①アセスメントを活用して自分のユニークな学び方を知る「自分学」、②鎌倉市の自然や文化等を題材にして自分のユニークな学び方を試す「探究」、③学びの成果を友人や大人たちと共有する「発表」の３要素で構成した。

探究プログラムの運営にあたっては、主に進行を担う「ファシリテーター」、専門的知識を活かして講義・ワークショップを提供する「ナビゲーター」、児童生徒に寄り添って学びをサポートする「コミュニケーター」が参画するとともに、指導主事をはじめとした鎌倉市教育委員会の職員も連携して、児童生徒が安心して学びに没頭できる環境を構築・実践した。これにより、令和７年度（2025年度）に本市が設置する予定の学びの多様化学校（不登校特例校）における新教科などの公教育や、地域の事業者が実施するワークショップ等で児童生徒の個性・特性に応じた個別最適な学びを実践するための要素等について研究した。

ウ　成果発表会（ULTLAインパクトデイ）

地域の文化的な拠点である鎌倉能舞台を会場として成果発表会を実施。プログラムに参加した児童生徒10名、児童生徒の保護者12名、市立小中学校教職員10名をはじめ合計73名が出席した。

成果発表会では、①かまくらULTLAプログラムの理念の共有、②令和５年度の学びの振り返り、③希望する児童生徒からの発表、④能楽師による能の実演、⑤特異な才能を持つ不登校経験者による講演・座談会を実施し、児童生徒の個性・特性に合わせた個別最適な学び（学習の個性化）について、児童生徒、保護者、教職員及び地域の教育関係者の理解を醸成する場の在り方等について研究した。

エ　ワークショップ研修

かまくらULTLAプログラムの主要な要素である「児童生徒が自らの個性・特性を知るためのアセスメントの活用」及び「地域の教育資源を活かした探究プログラム」の地域への普及を通じ、地域社会と学校との連携や地域社会の理解の醸成の在り方について研究するため、ワークショップ研修を実施した。

ワークショップ研修は次の３つのセッションで構成することとした。

【研修の構成】

①リサーチセッション

かまくらULTLAプログラムにおけるアセスメントの活用、地域の財（自然・歴史・人材など）を活かした探究プログラムのデザインについて学んだ。

②ランチセッション

過去のかまくらULTLAプログラムでも実際に取り組んだ「サラダづくり」を実際に体験することを通じて、五感をフルに活用しながら参加者が「なりたい自分」をイメージするワークショップを実施した。

③ワークセッション

個々に作成したビジョンコラージュを基に「子供たちと共にありたい姿」についてグループごとにブレインストーミングを行うとともに、地域の教育資源を活用して実現できそうなプログラムについて検討するワークショップを実施した。

オ　外部事業者との連携

学術的な知見を取り入れたアセスメントと地域の教育資源を活かした探究プログラムの開発・実施には高度な専門性が必要であり、教育委員会のみでは実施が困難であることから、再委託業者（株式会社SPACE）と連携してプログラムの企画・運営を実施した。

プログラムの企画・運営に当たっては、教育委員会の主導の下、月１回程度の定例会議等を通じて緊密に連携しながら取り組んだ。

カ　保護者との連携・共有

保護者のプログラムへの参加依頼（各プログラム３日目及び成果発表会のみ）及びアンケートによる保護者の意見収集を通じて、個性・特性を前向きに捉えた子育てに繋げていくことができる情報共有の在り方について研究した。

月	取組内容
４月	
５月	
６月	【探究プログラム】 ・プログラムの開発に着手 【ワークショップ研修】 ・ワークショップ研修の開発に着手
７月	【探究プログラム】 ・参加者募集開始 ・アセスメント（１回目）の実施
８月	
９月	【探究プログラム】 ・海のプログラム参加確定者の学校における様子等に関する情報収集 ・海のプログラム（３日間）の実施 ・海のプログラム終了後、アセスメント（２回目）を実施 ・海のプログラム終了後、児童生徒及びその保護者にアンケートを実施
10 月	【探究プログラム】 ・森のプログラム参加確定者の学校における様子等に関する情報収集 ・森のプログラム（３日間）の実施 ・海のプログラム終了後、アセスメント（２回目）を実施 ・森のプログラム終了後、児童生徒及びその保護者にアンケートを実施
11 月	
12 月	【ワークショップ研修】 ・ワークショップ研修（6 時間程度）の実施
１月	【成果発表会（ULTLA インパクトデイ）】 ・成果発表会（ULTLA インパクトデイ）の実施
２月	【その他】 ・対象生徒・保護者へのインタビュー実施 ・アセスメント、探究プログラム及びワークショップ研修の効果検証 ・研究成果報告書の作成
３月	

３．実証研究の成果や課題・改善方策

＜成果＞

（１）アンケート

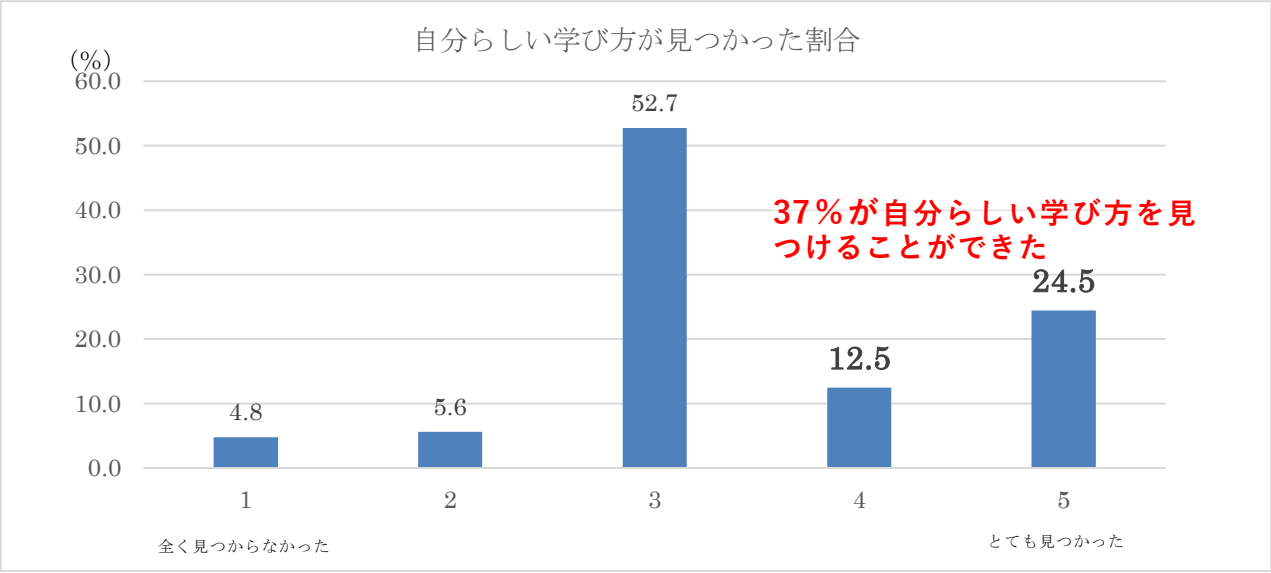
かまくらULTLAプログラムを通じた児童生徒の変容等に係る効果測定を目的として、各プログラムの実施後（一部実施前を含む）にアンケートを実施した。アンケート結果を通じて、次の考察を得ることができた。

ア　自分らしい学び方が見つかった度合いについて

各プログラムの実施後に「自分らしい学び方が見つかったか」について、「とても見つかった」から「全く見つからなかった」の５段階評定で参加者に回答を求めたところ、37%の児童生徒が「とても見つかった（５）」「見つかった（４）」と回答し、「全く見つからなかった（１）」「あまり見つからなかった（２）」と回答した児童生徒が約10%に留まった。このことから、プログラムに参加した一定の児童生徒が自らの個性・特性に合った学び方を見つけることができたことが分かった（グラフ①）。

この要因としては、①プログラムの中で児童生徒が自由に学習方法を選択できること、②プログラムのコンテンツに多様性があり、自分らしい学び方を様々な形で試す機会があること、③特性があることを踏まえながら寄り添うことで、児童生徒が心理的安全性を感じながら自分らしく学びに取り組むことができたことなどが挙げられる

【グラフ①】



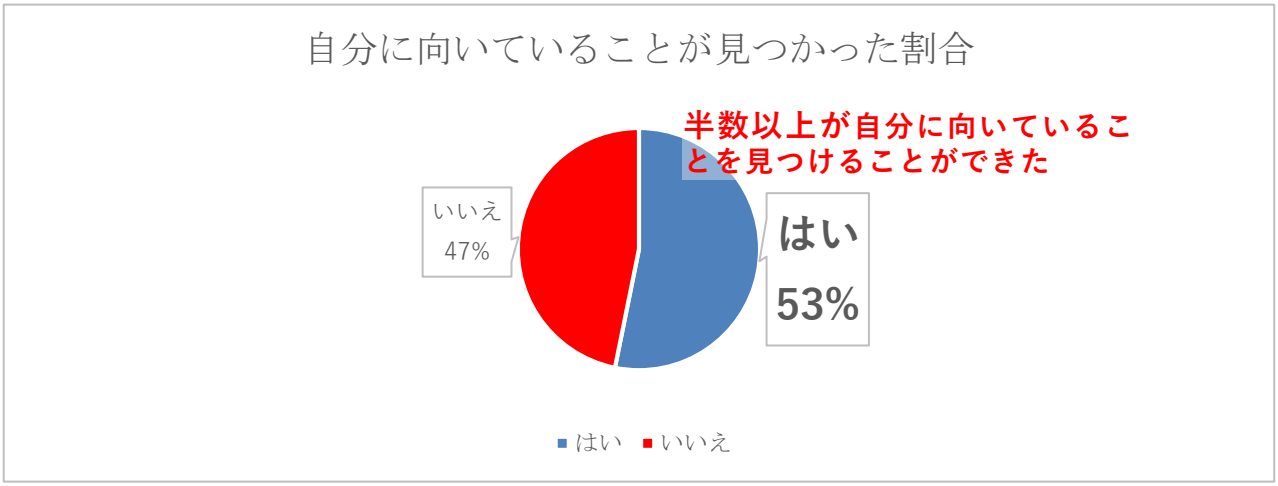
イ　自分に向いていることが見つかった割合について

「自分に向いていることが見つかったか」という質問に対して、「はい」と回答した児童生徒は53%、「いいえ」と回答した児童生徒は47%との結果となった（グラフ②）。

アで述べたとおり、約40%の児童生徒が「自分らしい学び方が見つかった」と感じていると同時に、「自分に向いていることが見つかった」と感じた児童生徒についても半数以上に上った。各３日間という短期間で参加者の半数以上が自分に向いていることが見つけることができたことは、プログラムが児童生徒自身の新たな側面に気づかせる機会として一定の効果を発揮したと考えられる。

一方で、「自分らしい学び方が見つかった」という質問において「どちらともいえない（３）」、「自分に向いていることが見つかったか」という質問において「いいえ」と回答した割合がそれぞれ約50%と最も多い結果となったことから、この層の児童生徒に対して有効なアセスメントと探究プログラムの在り方について引き続き検討していく必要がある。

【グラフ②】

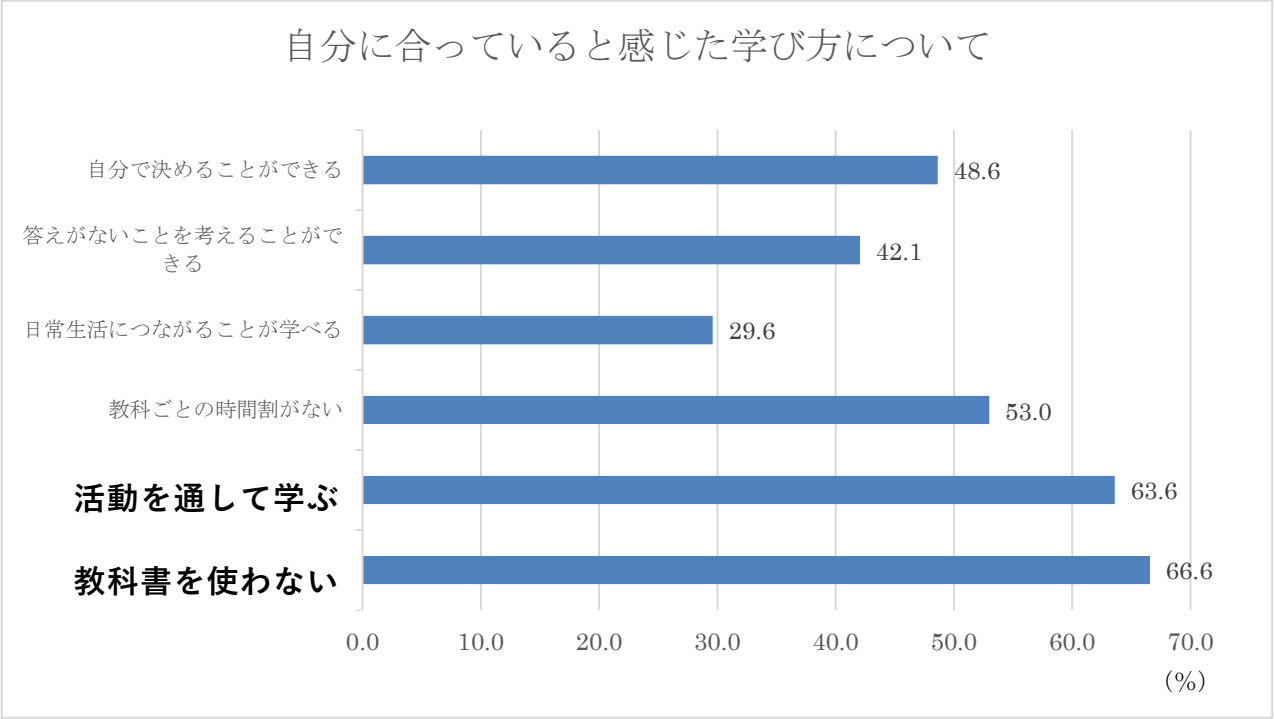


ウ　自分に合っていると感じた学び方について

「自分に合っていると感じた学び方」についての質問では、「活動を通して学ぶ」「教科書を使わない」と回答した割合が高かった。

この結果から、自らの特性に起因して学校での学習に馴染めない児童生徒に対しては、①教科書の内容に囚われず学習できる内容が選択的であること、②体験型の学習ができることが有効であることが伺える。

【グラフ③】



エ　学びへの指向性について

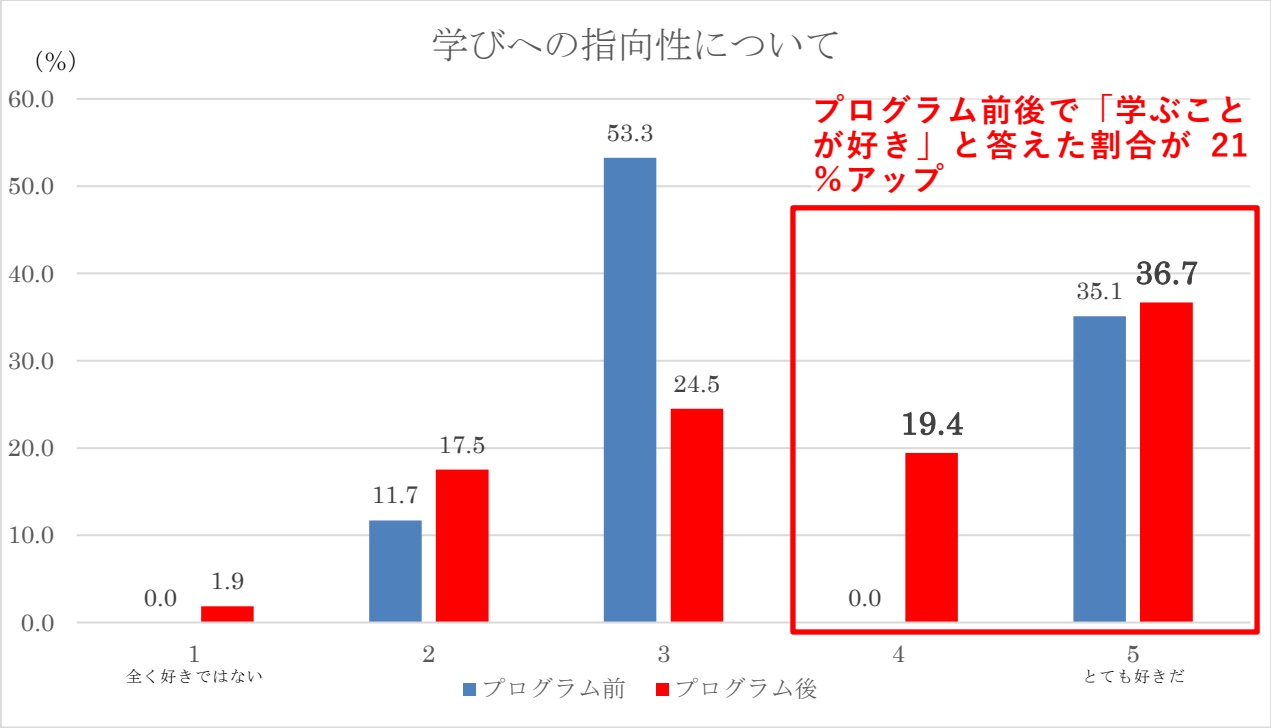
「学ぶことが好きか」という質問について、「とても好きだ（５）」から「全く好きではない（１）」の５段階評定で参加者に回答を求めたところ、プログラム前では「とても好きだ（５）」「好きだ（４）」と回答した割合が合計で35.1%であったのに対し、プログラム後では合計で56.1%と21%上昇した（グラフ④）。プログラムに取り組

む中で、参加者の学びに向かう姿勢が前向きになったことが伺える。

学びが好きである理由としては、「興味のあること好きなことで新しいことを知ると理想に近づいた気がするから」、「興味のあることを知るだけでワクワクするから」、「体を使って学んでいくことが好きだから」、「学びは世の中の面白さを知るために必要な情報だと考えたから」、「自分の考えが広がるから」といった声が挙げられた。

こうした声から、プログラムが①様々な分野で活躍する専門家（ナビゲーター）による体験を主軸とした学びを提供していること、②多種多様なコンテンツが参加者の興味関心や特性に沿った学びを提供できていることなどが学びに向かう姿勢を前向きにする要因として考えられる。

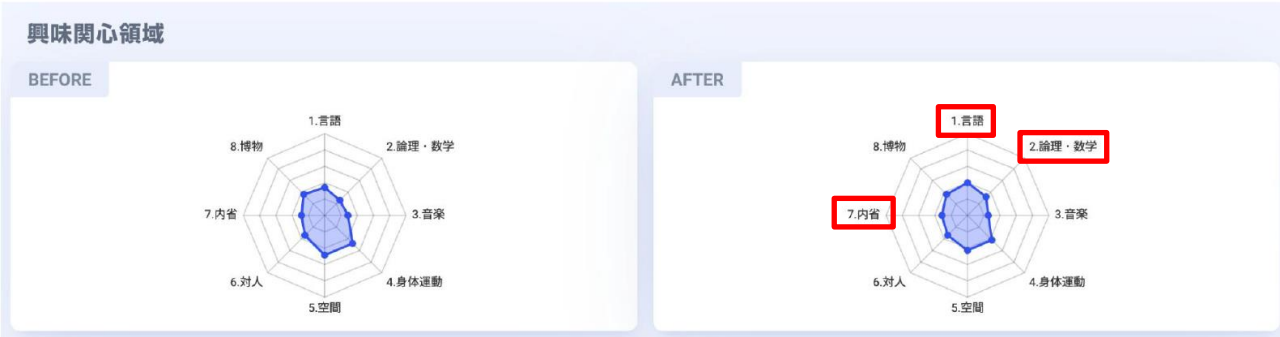
【グラフ④】



（２）アセスメント

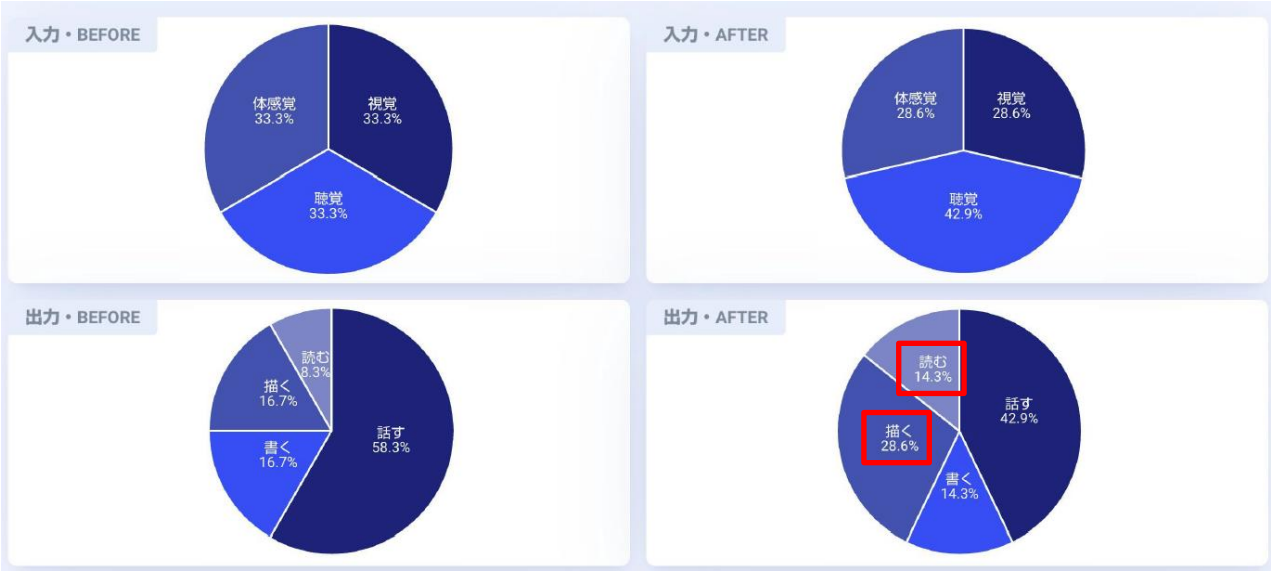
プログラムの実施前後において児童生徒の興味関心領域、認知特性、思考スタイル等に関するアセスメントを行うとともに、プログラム当日の「自分学」を通じてアセスメントの読み解き方を参加者の児童生徒へ教示することで、自身の学び方の傾向について把握しながら自分に合った興味の対象や学習方法・学習環境を調整できるように意識づけを行った。アセスメントの結果としては次のような傾向が見られた。

ア　興味関心領域



興味関心領域の「８つの力」について、プログラム前後の平均値を比較したところ、若干ではあるが、「言語」、「論理・数学」、「内省」の項目が増加し、「音楽」、「身体運動」、「空間」の項目の減少が認められた。

イ　認知特性



認知特性の入力タイプの実施前後を比較したところ、「聴覚」を得意だと感じる割合が増加した。出力タイプについては「話す」と「書く」が減少し、「描く」と「読む」が増加した。

ウ　思考スタイル

思考スタイルについて実施前後を比較したところ、機能は「立案型」、水準は「巨視」、範囲は「独行」、傾向は「保守」の割合の増加が認められた。

（３）個才とのマッチング

「（１）アンケート」の項目で述べた通り、プログラムを通じて「自分に向いていることが見つかった」と回答した児童生徒は53%との結果となった。

「自分に向いていること」の具体的な内容としては、「色々な声を出してみること」「答えのないことを探すこと」「座学だけではなく体を動かすこと」「化学に関すること」「工作や実験」「自分の力を使って問題を解決すること」などが挙げられた。アセスメントを通じて自らの興味関心領域や特性を理解した上で、教科横断的かつ多様性のあるプログラムに取り組んだことが児童生徒に内省の機会を提供し、自身に向いていることに気づかせることに寄与したと考えられる。

（４）カリキュラムと教科学習の紐づけ

かまくら ULTLA プログラムで実施している探究プログラムは、教科学習の内容と相互につながる視点を意識して設計している。探究プログラムにおける学びを教科等の学びに活用したり、関連づけたりすることで、より一層学びが深まったり、活用できることが実感できることが期待される。探究プログラムに取り組む中でも、取り組む内容がどの教科とつながっているか、あるいはどのように活かしていけるかを考えさせる場面が多く用意されている。

以下の表（表１）は、探究プログラムの具体的な活動内容と、教科との関連性を示したものである。教科とのつながりに気付けたり、関連性を意識したことで学んだことが役立つと実感したり、新たに興味を持ち今後の学びや人生に活かそうとしたりする姿勢も見られた。

これからの時代に求められる資質・能力を育む上で、教科横断的な視点で学習活動を

編成することは特に重要である。本プログラムにおける教科等とのつながりを捉えた探究活動において、相互の関連付けや横断を図る手立てや体制についてより一層研究していくことが望まれる。また、プログラム構成の背景にある教科の紐づけをスタッフが共有しておくことで、児童生徒への声がけや学びのフォローアップがより綿密にできると考える。

【表１】

海のプログラム	
プログラム内容	教科内容
「海のカメレオン」タコの不思議に迫る！	「健康な生活と病気の予防」（保健体育） 「地域の食材と食文化」（家庭科） 「生物」（理科）
自然の天才に学び、世界を変える？！	「生命の種類の多様性と進化」（理科） 「自然と人間」（理科）
立つためのセンサーはどこにある？	「水の中を移動する運動遊び」(体育)
「無」ってなに？「無、無、無」への挑戦！	「心の健康」（保健体育）
人の喉が楽器になる！？七色の声で音を奏でる	「歌唱」（音楽）
イノチのビートライブ、開催！	「表現」（音楽）、「表現運動」（体育）

森のプログラム	
プログラム内容	教科内容
直線、破線、あなたは何線？	「書道」（国語）、「表現」（美術）
水は水でも違う水	「水」（理科）、「飲料水等の確保」（社会）
おーい、お水、音で探るあなたのシグナル	「表現」（音楽）、「音」（理科）
ゆらめく、きらめく光のマジック	「光の性質」（理科）
虹は何色？色に隠されたヒミツの法則	「色の三要素」（美術）
鎌倉野菜の色のパワー	「地域の食材と食文化」（家庭科）
波長の合うライトは作れるか！？	「光の性質」（理科）、「物語を書く」（国語） 「プログラミング」（技術）
音と色、響き合う光のセレモニー、開催！	「鑑賞」（美術）

（５）地域社会との連携・理解の醸成

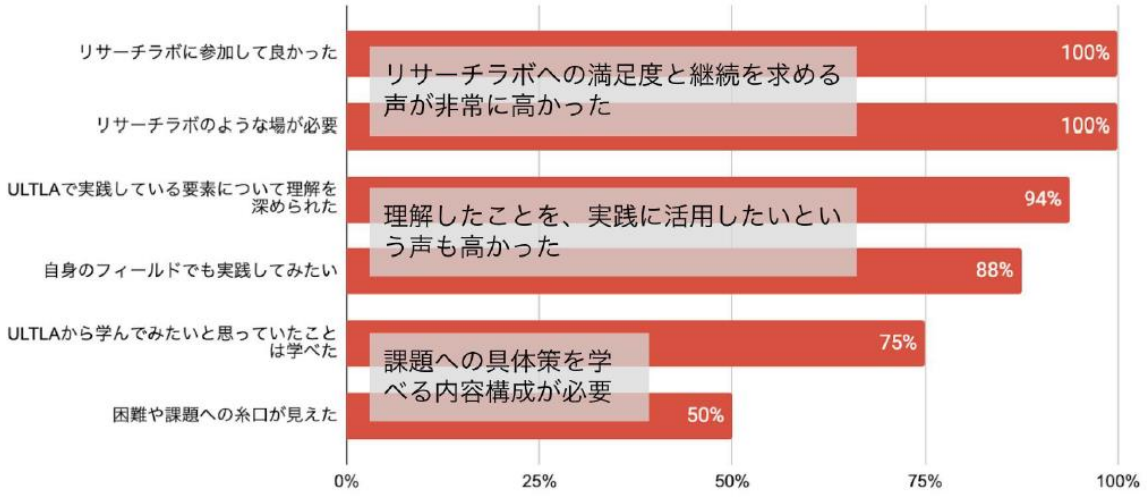
児童生徒の特性に合わせた個別最適な学びを実現するための地域社会との連携・理解の醸成の在り方について研究するため、かまくらULTLAプログラムの要素を地域に根付かせることを目的としたワークショップ研修（かまくらULTLAリサーチラボ）を実施した。

ワークショップ研修実施後のアンケートでは、「リサーチラボに参加して良かった」「リサーチラボのような場が必要」という回答が100%、「ULTLAで実践している要素について理解を深められた」という回答が94%、「自身のフィールドでも実践してみたい」と回答した割合は88%に上った（グラフ⑦）。

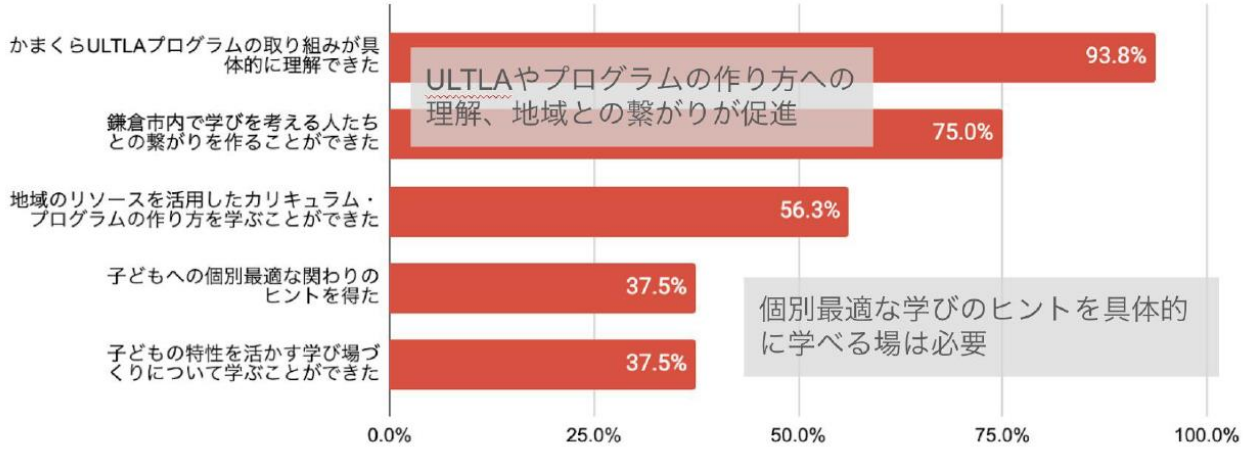
一方で、「困難や課題への糸口が見えた」が50%、「子どもへの個別最適な関わりのヒントを得た」「子どもの特性を活かす学び場づくりについて学ぶことができた」との回答が37.5%に留まった（グラフ⑦⑧）。

この結果から、かまくらULTLAプログラムに関する基本的な理解が深まるとともに、教職員と地域の教育関係者が繋がる契機となることで一定の効果があったものの、参加者が研修で得た知識を各々のフィールドで活用していくためには、更に具体的なケースを想定した研修が必要であることが明らかになった。

【グラフ⑦】



【グラフ⑧】



＜課題・改善方策＞

（１）アセスメントの効果検証方法の見直しについて

令和５年度の研究においては、児童生徒の特性にアセスメントがどれだけ探究プログラムや普段の学習・生活に取り組む姿勢に影響を及ぼしたかについてのデータが不足する結果となった。今後、通常校におけるアセスメントの実装について見極めを行うためにも、アセスメントの効果については更に検証していく必要がある。

【改善方策】

プログラムの実施前・実施直後だけではなく、プログラム参加から一定の時間が経過した後に児童生徒及び保護者にアンケート等による追跡調査を実施することで、アセスメントの有効性や児童生徒の変容について更なる検証を実施する。

（２）ワークショップ研修の構成の再検討について

３（６）で述べたとおり、ワークショップ研修は参加者の満足度は高かったものの、学んだ内容が現場での実践に直接繋がる感触を得た参加者の割合は低い結果となった。地域に個別最適な学びを根付かせ、その効果を児童生徒に還元するためには、更に実践的な研修を実現していく必要がある。

【改善方策】

１日という短時間の研修の中で理論と実践を学ぶこととなったことから、参加者の理解度及び定着度が十分な結果とならなかったことが考えられるため、次年度は「理論編」と「実践編」などテーマ毎に分けて研修を実施するとともに、「実践編」においてはそのままパッケージとして教育現場に持ち込めるような探究プログラム開発をワークショップで行うなど、より実践的な内容とすることを検討する。